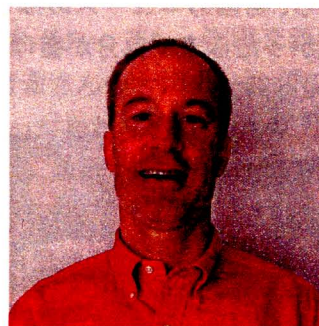


## 中国に住んだ3年間

本学共通講座のクリストファー・ボゼック講師が、中国在住の経験を持つことは皆さんご存知でしょうか。大学卒業後初めての勤務地に中国を選び、大学で英語を教えた経験と、当時の様子について書いてもらいました。

中華人民共和国は、私が最初に住んだ外国でした。1988年に英語教師として赴任しました。わずか23歳で、発展途上国に住むという大きな決断をしたのです。教員経験は皆無でしたが、中国はとにかく英語教員が不足していましたので、ネイティブスピーカーなら誰でも歓迎という状況でした。私が行ったのは、ユニバーシティ・ランゲージ・サービスという、英語教師のグループの一員としてです。メンバーのほとんどは独身の若い教員でしたが、子連れの既婚者もけっこういました。



共通講座 講師  
ボゼック・クリストファー

中国の第一印象は、今でも忘れられません。通りの街灯の下でピリヤードをしている人々。二人の中国人が会話をしているのを耳にして、喧嘩をしているのだと思ったこと。これらが最初の衝撃でした。

私が派遣されたのは、東北部の町、瀋陽にある小さな三年制大学です。赴任に先立って2、3日観光で北京に立ち寄り、万里の長城、明の十三陵、そして故宮を見学しました。北京から瀋陽までは列車で移動し、瀋陽の駅の前で最初に目にしたのは戦車の記念碑でした。町にはもうひとつ、毛沢東の巨大な記念碑もありました。おそらく今日でもまだ立っているのではないのでしょうか。

私が行ったころの中国は、今とはまったく異なっていました。1988年の生活環境は、大都市でもまださほど良くはありませんでした。例えば、電気が使えない時間帯があるのです。私が住んでいた区域では、平日の9時から11時と13時から16時は停電でした。この時間帯は、冷蔵庫をうっかり開けないよう注意しなければなりません。シャワーで温水が使えるのは週に2、3回だけでした。インターネットもない時代ですから、ニュースはBBCをラジオで聴きました。

英語を教えるのは初めてでしたから、早急に学ばねばなりませんでした。渡された教科書は短い英文と語彙、そして質問がいくつか載っているもので、大教室での会話の授業にはあまり向かないものでした  
(次頁に続く)

が、最善を尽くしました。中国人学生は、ネイティブスピーカーとであれ仲間の中国人学生とであれ、英語を練習するのに臆することはありません。それが、「イングリッシュ・コーナー」が中国でとても浸透していることのひとつの理由です。早起きをしてサッカー場を歩き回りながら英語の教科書の音読練習をする学生もいました。非常に熱心な学生がたくさんいました。英語を習得することで、いろいろな可能性が開ける時代だったのです。

3年間の滞在で、瀋陽と大連に住みました。瀋陽は中国で4番目に大きな町です。当時はどこの家庭でも石炭を焚いており、空気は汚れていました。冬に自転車で10分も走ろうものなら、顔がすすで黒くなりました。コンタクトレンズの着用は不可能でした。大連は港町で観光客も多く、高級ホテルやビーチがありました。外国人の数は極めて少なく、ロシア人の水夫ぐらいでした。よく、「ロシア人」と指を指され、「いや、アメリカ人です」と答えると、とても驚かれました。中国語ができるとは思わなかったのでしょうか。



中国のマクドナルド第一号店  
(北京)にて

中国にいる間によくやったことが2つあります。ひとつは読書です。もちろん、中国に行く前も本は読みましたが、中国では読む量がぐんと増えました。アメリカのテレビ番組が見られなかったことが理由のひとつです。中国のテレビは当時、番組が非常に限られていました。読書の習慣は、中国を去った今も幸いまだ続いています。もうひとつの習慣は手紙を書くことでした。メールもネットもない時代でしたから、自国のニュースのほとんどは手紙から知りました。返事が欲しくて、毎日書きました。「手紙が欲しかったらまず自分が書け」というのが私のモットーです。



瀋陽の大学にて、仲間の教員と

私はクリスチャンです。中国で、クリスチャン同士の間でもよい交わりがありました。私が訪中したのはクリスチャン教員の一団だったので、一緒に派遣された仲間の英語教員ももちろんクリスチャンでした。共に祈り、礼拝する仲間がいることはとても重要でした。毎週日曜日は3人に加え、町に住んでいるほかのクリスチャンも一緒に集まりました。我々と同じような英語教員や、アフリカから留学している医学生もいました。宿舍の狭い部屋での礼拝のひとつは、中国での最高の思い出のひとつです。誰かが進んで話をし、伴奏なしで歌いました。

初期のクリスチャンの集会はあのようなものだったのではないかと今でも懐かしく思い出します。

ひとつ、私が身を持って感じた中国文化は、人間関係の重要さです。当時、人間関係は物資を得るためのカギでした。普通なら、欲しいものを手に入れるのに必要なのはお金ですが、当時はコネでした。コネが日常生活のきわめて重要な役割を果たしていたので、中国人はよく、将来役に立つのではという理由で人と友人関係を結ぶように感じました。私などは大したコネにはなりませんでした。人によっては外国人と知り合いであるのはカッコいいと考える人もいたようです。

3年間のうちに、その後長いつき合いになる友人が何人かできました。時間と距離に隔てられても、中国人は友人を忘れません。中国を離れてもう何年も経ちますが、当時の友人とはまだ連絡を取っていません。もしまた訪中の機会があれば、きっとすぐに昔の仲がよみがえるでしょう。実際、つい先月も昔の教え子がインターネットで私を見つけてメールを送ってくれました。久しぶりのやり取りはとても楽しかったです。中国人とのつき合いはそういうもので、私はこうした関係をとっても有難く思います。

# インターナショナルコンサート @ International "C" Hour

12月のインターナショナルCアワーにて、恒例のインターナショナルコンサートを催しました。今年で5回目になるコンサート、OFICの緒方雄太郎さんの司会のもと、「常連」の出演者がさらに腕にみがきをかけている様子がわかり、加えて新しい留学生によるいろんな言葉の歌声が楽しめる場となりました。



「常連」の一人、電気電子工学科4年の沖松一弥さんを中心とするグループ「ペプシ」は、オープニングを飾るマイケルジャクソン



メドレー。マイケルの出演していたペプシコーラのCMを、歌と踊りで熱演してくれました。同じく常連の電気電子4年の瀬田純己さんは、「黙ればもっと上手く弾けるかと思って」と、今年は歌なしでギターの上達ぶりを披露。一方、「新顔」のほうではベトナムからの留学生第一号のファム・スアンクエンさんや韓国からの短期留学生キム・ヨンジュンさんがそれぞれの言葉の歌をしっかりと聴かせてくれました。ポーランドから来ているアンナ・プオンカさんは、ポーランド語の歌に加えて、すっかり歌い慣れた雰囲気日本の歌謡曲を熱唱、皆会場から盛んな拍手を浴びていました。

毎年必ず1組は出現する、日本人学生と留学生の混合グループも、国際交流センターとしては嬉しい出演者。今年には林心盈さんと陳芳渝さんの台湾ガールズに、中国語語学研修二回参加の結城雄大さんと藤井勇貴さんが加わり、Kiroroの「未来へ」を中国語と日本語の2ヶ国語で歌ってくれました。コンサートの最後は日本語初級クラス受講生多数による日本語の曲をパワフルに合唱してくれ、ここ数年でぐっと増えてきている短期留学生の元気と日本語習得意欲が感じられました。



## スキー研修終わる



1月7日、恒例の留学生スキー研修を端野にて開催しました。今年も多く留学生が全くの初心者。小雪のちらつく中、元気にスキーを楽しみました。1昨年に続き2度目の参加となった、中国は内モンゴルからの留学生、サレンゴワさんは、「1回目のときは林につっこんでしまい、切り株にぶつかってとても痛かったです。怖くて去年は参加できなかったのですが、今年は少し滑れるようになりました」と嬉しそうに話していました。

# かるた・たこあげ・こままわし

## @ International "C" Hour

1月のインターナショナルCアワーは、「お正月の日本の遊び」と題して8日に開きました。参加者はまず半紙とストローを利用した簡単なたこ作りに挑戦。あいにく前日までの強風がうそのように止み、思うように揚げることはできませんでしたが、中にはうまく舞わせて歓声を浴びた人もいました。



その後は、日本人学生のリードで留学生が多数、かるた、すごろく、こままわし、福笑いなどの遊びに興じ、室内に笑いがはじけていました。



## 北見の冬をあったかに 一手編みのセーターの贈り物

寒さがひとときわ身にしみる今年の冬ですが、本学留学生の中には、真新しい厚手のウールのセーターで身も心もあったかく過ごしている学生が3名います。毎年3枚ずつ、国際交流センターに手編みのセーターを贈って下さる、北見市民の市山規さんの作品です。写真を見ての通り、今年も3名ともまさにあつらえたかのような似合いぶり。写真中央の、中国からの留学生、陳 添勇さんは、「地元の方にこんな親切をいただいて、まるでふるさといにいるかのような気持ちになります」と笑顔で語っていました。市山さんが毎年、何時間もかけて作ってくださる暖かい贈り物に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。ありがとうございました。



## お知らせ

\* 学年末の恒例行事、「留学生交流のゆうべ」を、3月9日18時より本学アトリウムにて開催します。卒業・修了する留学生のお祝いとお別れのパーティです。参加される方は、写真撮影がありますので17時半までにお集まり下さい。

\* 3月1日より3週間、中国語研修団がハルビン工程大学に滞在します。今年の参加者は6名です。本学の交流協定締結校である同大学にて、各国からの留学生とともに中国語を学びます。

World Wisdom

覚えているべきことを忘れることがありませんように。忘れたほうがよいことを、根に持つことがありませんように。

—出典不詳